



天上人の宴
第二話



船魂の怪奇

yae-mon



あれから何回、天上人の滞在に立ち会ってきたことだろう。

19xx年6月13日、私は休日であったこともあり、午後一番から山上の館に行った。

上空には、1機のやや大きめの宇宙船が停まっており、中庭には、直径15mほどの亀甲型の船が着陸していて、中庭を占拠したような格好になっていた。

居間に入っていくと、この日の予定表どおり、そこにはアルデバラン第8惑星のチャービルとセージがあぐらをかいて、畳に直置きの14インチのテレビを見ていた。

ちょうどタモリのバラエティー番組がかかっており、彼らはそれに夢中だった。調査になるのか、それとも単なる娯楽かは知れないが、こうした光景を見ると、何故かほっとしてしまう。

私：「やあ、いらっしゃい」

チャービル：「おお、来たか。宿帳のほうは、もうサインしといたぞ」

私：「もう一組の御一行さんは？」

セージ：「ああ、あれは整備士さんたちの船でね、
宇宙を駆け巡っているんだが、我々の航路とは
このオアシス付近で近づくことになっていたので、
予約していたんだ。彼らも、もう宿帳には記入している」

私：「テレビ、面白そうですね」

チャービル：「そうだ。これはいいぞ。任務は気を張ることが多いから、
こういう目先の変わったのは、気晴らしになって丁度いい。
それよか、どうなんだ、そっちの景気の具合は、よお」

私：「だめですよ。ぜんぜんだめ。
今、どうしようかって、困ってる」

チャービル：「そんなかんじだな。気の毒なこった。
社会システムもそうだが、
この星だけが随分と立ち遅れちまったもんな」

私：「どんな風にすれば良くなるのかねえ？」

チャービル：「そんなこと知ったことか。
自分たちのことは自分たちで解決する。
それがこの宇宙の鉄則だ」

セージ：「チャービルよお、なにもそこまで言うことないよ。
ネアン。いつかは分かる。きっと分かるようになる」

チャービル：「そんなこと言って、あんまり気を持たせてやんなよ。
たいして頭が良いとは思えないし、
こいつ一人が理解したって、何の役にもたたんだろ。
そうか。だからこそ、教えても人畜無害ってことか」

私：「人ごとだと思って・・・あのう、私は別に知りたい
とは思わないし、知ったとて活用の道なんか知らんです。
私はただ本業で飯を食べている合間に、
こんなところで奉仕させられてるだけなんですよ」

チャービル：「ま、いいじゃないか。その奉仕精神というのが大切なんだ」

私：「まったく。何言ってるんですよ」

そのとき、扉を開ける物音がして、
分厚い皮つなぎを着た男が一人入ってきた。

整備士：「終わったよ」

チャービル：「どうだった。俺の愛機の具合はよお」

整備士：「うん。なかなかいいよ」

チャービル：「精神的なほうも問題ないのか」

整備士：「大丈夫。充実してるようだ」

チャービル：「それはよかった。じゃあ、今回は、1 スポロンの後だな。
またその頃、最寄りのカスタマーシップに頼むとしよう」
(1 スポロンは地球時間で、約0.8年)

整備士：「それで大丈夫と思う。じゃ、これにサインを頼む」

整備士は、この館の主の私に一瞥をくれることもなく、
サインが書かれたものを受け取ると、
のっさのっさと中庭に出て、
上空からの光の柱に乗って去っていった。

私は、先程ふと気になったことを思い出した。

私：「さっき精神的なほうも大丈夫かと言ってたけど、
何なんです？」

チャービル：「ああ、それはな、船にも魂が宿っていて、その魂から
発する情動が正常域にあるかどうかということだ」

私：「魂とは？ 靈魂のこと？」

チャービル：「靈魂だって？うわっ、いきなり怖いこと言うなよ。
いろいろ思い悩む心を持ってるといったほうが適切だろうな。
こいつだって、元はといえば、馬だったんだ。
それなりの恋もしただろうし、理想もあつただろう」

私はそれを聞いて仰天した。

私：「な、何？それじゃあ、馬の生まれかわりが、宇宙船になったってー？」

私が大声を出して突拍子もないことを聞いたせいか、
チャービルは右手であばよの仕草をすると、
テレビに見入ってしまった。
それに代わって、セージがこっちを向いた。

セージ：「生まれかわりじゃないよ。スカウトされたんだ。
そうか、あんたが知るわけないもんな。
だが、今後のこともあるから、知っといたほうがいいな。
どうだ、チャービル」

するとチャービルは二度ほどうなずいて立ち上がり、
「ついて来いよ」と、私を宇宙船のところに伴った。

宇宙船は、決して馬の格好をしているわけではない。
ちょうど、亀のこうらのような小型船だ。
亀がスカウトされたというなら、分かる気もするが。

チャービル：「おお、アオよ。整備にうめこと見てもらえたんだろな。
おめもおとなしいで、
文句さ一つ言わずにいたんでねだろな」

私：「アオ？それなに」

チャービル：「こいつの名前じゃないか。あ、そうか、
こいつの馬の時代の名前だったな」

私：「じゃ、日本の馬？」

チャービル：「どこからスカウトされたんだっけか。
俺はそこまで知らないなあ」

私：「名前が日本風ですよ。それも、純日本風」

話は、知らない者同志がするようなやり取りとなった。

チャービルは、宇宙船の正面とおぼしきところに回り、洗面器ほどの突起部分をなでながら、語りかけた。

チャービル：「おめえ、日本から来ただけか」

アオ：「ブヒン、ブヒン」

チャービル：「どうやら、そうらしいべな」

私は、わが耳を疑った。
宇宙船が口を聞いたとは思わないが、エンジンの回転数を故意に操作して、馬の鼻息のような音を出してみせたのだ。

そして、チャービルの言葉が幾分なまったような気がしたのは、気のせいかな。

私：「あのう、少し翻訳機の出す言葉がなまったように思うんですが」

チャービル：「翻訳機は、話す相手の心情にあわせて、ちゃんとどこの国の言葉にでも訳せるようになっている」

なるほど、彼はそのとき馬に主点を置いて話していた。
馬にとって心地好いであろう言葉が、そのままこの翻訳機から出てきたに違いない。

つまり、馬の、いや、アオなる宇宙船の魂の出自は、日本でもおよそあのあたりになるか。

私自身もしっかりしていないと、これから先、
ついていけない気がするのだった。

私：「スカウトというのは、どんなふうにして？」

チャービル：「そりゃ、最初は強引なもんだ。
多分こいつなら、どこか野原でも走っていたんだろうが、
そこにスカウトシップが来て、催眠光線をかけて動けなくするだろ。
そして、船の中に吸い上げて、そこでいろいろ調べる」

私の脳裏に、キャトルミュチレーションという、
家畜が屠殺される怖い光景がよぎった。
そこで、精一杯当たり障りのないように、聞いてみた。

私：「血液型を調べたり、いろいろな研究のために
ナニするんでしょ？」

チャービル：「いいや違うよ。まず、心情調査を始めるんだ」

私：「この馬の血統はどうかとか、良い子孫を残せそうだとか？」

チャービル：「違う。それは身上調査だろ。心情、つまり、心」

私：「は？」

チャービル：「馬の心根が品行方正かどうか、
性格が荒かったり、短絡的でないかどうかだよ。
もしそんなことだったら、宇宙船の気分が不安定で、
俺達のほうが心配でたまらんだろ？
それをパスすれば、今度は馬の希望を聞く」

私：「馬の希望？ウツ°」

私は思わず吹き出し加減にそう言ったので、
チャービルは不機嫌な顔になった。

チャービル：「なんでおかしいんだ？
馬にだって、自分の希望も理想もあるわさ。
牛や馬みたいにコキ使ってへたばれば、
後はポイみたいなことはしないよ」

牛や馬みたいに？なんて馬鹿な表現をするんだろ。
これも翻訳機が、「親切。地域性重視。分かり易く」を
モットーにしているゆえの弱点かと思った。

チャービル：「なにをニタニタしてるんだよ。ようは馬だって、
しかるべくしてその経験を踏んでいる魂なんだから、
幸せを求める気持ちに変わりはないだろ。
だから、本人の希望をまず聞く。
野原を走りまわる代わりに、
空を飛んで、時には宇宙をかけ巡りたくないかって。
すると、中には、ここがいいと言うものも居れば、
いや実はここでは不満足なんだ、
一つどうだろう、引っ込み思案な僕なんだけど、
やらせてもらえないだろうかと言うものも居る」

私：「そこまで飾りをつけて物を言う馬も居るんですか」

チャービル：「そりゃそうだ。皆、感情を持ちあわせているんだからさ。
厚顔無知なのも居れば、おしとやかなのも居る。
それゆえ、魂の資質が物事や任務を決める際の
基本として据えられているんだよ」

私：「は一」

チャービル：「なあ、アオよ。おめえは素直な馬っこだったべな」

アオ：「ブヒン、ブヒン」

とても聞いてはおれなかった。
私は、宇宙船になることを承知した馬の
たどる運命についても聞いてみた。

チャービル：「そりゃ、馬としての命はそこで終わるんだ。
だから、体は必要ない。
死体になった馬は地上に落とされて、土に戻る」

私：「変なところが切り取られたりして、地面に転がってるんですよ」

チャービル：「ああ、それは、魂が主として根拠にしていた臓器だ。
それを取れば、魂はひとりでに着いてくる。
それをできあがった宇宙船の心臓部に持って行って
処理をすれば、できあがりだ」

何気なく聞いていればたいしたことないようだが、
深く考えれば、ぞっとする話した。
何か言い知れぬ不快感が伴った。

私：「そんな風にして生まれた新しい船なんだから、
もうちょっといい名前にしてやったらどうなんですか。
ペガサスといった風にでも」

チャービル：「なに言ってるんだ。さっきから俺は何を話してる？
魂の個性を重視してるってことだ。
こいつがアオにしてくれというから、そうなったんじゃないか。
なあ、アオよ」

アオ：「ブヒン、ブヒン」

まただ。はいはい、分かりました。

チャービル：「そりゃ、こいつが、もっと高尚な名前にしてくれ、
というならそれにやるさ。
だが、俺はアオのほうが最高だと思う」

アオ：「ブヒン、ブヒン」

そこで、私ははっと気が付いた。
もしかして今、アオは反対意見を唱えたのかも知れない、と。

私：「もしかして、この船、
ブヒンブヒンしか言えないんじゃないですか？」

チャービル：「いいや、そんなことない。おい、アオよ。
おめ、いやなときどき言うかやってみんべ」

アオ：「ブヒッ、ブヒヒッ、バフッ、ブルル」

船体が、単気筒エンジンの回転ムラさながらに揺れた。
なるほど、よく分かりました。ハイハイ。
私は、顔を曇らせながら、何度もうなずいた。

チャービル：「俺達は、どこかの政府のように、人が反対唱えてるのに
賛成してるようにでっち上げたりはしない。ほんとに、もう」

私：「分かりましたです。ハイ」

しかし、なぜここまで苦勞してまで、魂の導入が
必要なのだろう。相手が機械であるのみならば、
従順で、操縦士の思うとおりにできるだろうに。
私は、その辺を聞いてみた。

チャービル：「それはだな、第一に、学習するということが
宇宙船にも必要ということ。
第二に、航路に対する直観的な予知、
予測ということが必要な場合が多いということ。
第三に、環境にやさしい船であらせるために、
あえて配属先の生き物を起用しているということ。
第四に・・・」

いくつもいくつもその理由が語られていったが、
後のものは専門的になって、とうとう理解できなかった。
初めの三つについて、彫り下げてみたく思った。

私：「あの一、学習というのは、機械にもできますよ。
ソフトを工夫しさえすれば。
実際に、人工知能や学習知能がありますもん」

チャービル：「そら、そうでしょね。
しかし、下手したらそれはいつか魂を持ちまうもんね。
ようは機械の回路や動作手順が、
魂を繋ぐ性質のある特別なパターンを持ったとき、
魂はどこからかやってきて繋がって、
学習能力は飛躍的に向上するようになる。
地球上の超大型コンピューターは、
もうすぐそのキーパターンを獲得しそうだな」
(これは作者の新ネタの仮説でマユツバモノです)

チャービル：「だが、怖いぞ。魂を用意して持ってこなかったら、
どんなのがくつつくか分からんからな。
変なのがくつついたら、とんでもないことになることもある」

私：「突然、ボンッとか？」

チャービル：「そう。ボンと正月と一緒に来たようにして、
万事休すってこともな。
だから、心して選びぬくのよ」

私：「(まあ、何でもやって一な)
じゃあ、3番目の環境にやさしいというのは？」

チャービル：「統計的データから得られた結論だが、
主たる任地で調達された魂というのは、
そこで生きるものの実情をよく理解しているためか、
有害電磁波や放射能などの発散を、劇的に低減させるんだ。
つまり、生物的心情的配慮というもんかも知れないな」

私：「な、なんと」

チャービル：「これがよその出身者だったなら、地上に降り立った際に
放射能を付近にばらまいたり、火災を起こしたり、
電磁攪乱を起こしたりする。
こんなやつのに、戦闘機がスクランブルなどしていったら、
スクランブルエッグにされるだろな。」

あ、いいもの思いだしちゃった。後で作ってもらえんかな。
コーヒーも付けて。あの味が忘れられん。なっ、な」

私：「はいはい、いいですよ」

チャービル：「そのかわり、いいこと教えてやろう。ホントは秘密なんだが。
問題点として、生き物だったものの魂を起用した場合、
時々妙な事件が起きる。たとえば、このアオの場合だ。
ユーラシア大陸のあるところに俺達は用があって、
下船行動を取って戻った。
発進して宇宙に出たまではよかったが、
慣性航行を取っている暇な時間帯に、
エンジンの回転にむらが出始めたんだ。
例のブヒンブヒンが始まったんだ。
それも、随分と変則的な調子だった。

とうとう故障したかと、機械室を開けてびっくり、
そこに一頭の馬がいて騒いでいた。
馬は、こっちに気がついて、なんとかしてくれって目を向けて、
首振りながらブヒブヒ言って、前足なんかも
振りあげてるじゃあないか。なんだと思う？

俺達の留守に、アオのやつ、
飛行中にマークしていたメス馬をさらって乗せていて、
催眠が解けてから、口説いていたというわけだ。
声はすれども姿は見えないもので、
すっかりメス馬は脅えきっていたなあ」

そのとき、ひとしきりアオがいなないた。

アオ：「ブヒッ、ブヒブヒ、ブヒヒーン」

どうやら、そのときのことを思い出しているようだ。

私：「そのときどうしたんですか。いっしょにしてやったとか」

チャービル：「バカ言っちゃいけないよ。

機械と馬がいっしょになれるわけないだろ。

メス馬さんに丁寧に謝ってだな、その時の記憶を催眠機で消して、もといたところに送り届けたよ。

2スタロンの遅れをきたした」（1スタロンは地球時間の約40分）

アオ：「ブヒ、ブヒッ、ブルル、ブルル」

一層激しくなったようだ。どうやら、その処置に抗議しているらしい。

チャービル：「それからがアオの再教育だ。

まあ、こうしたことはある程度起こりうるということで起用しているから、体罰などを与えるということではない。

しっかりと、今ある立場と、任務の重さというものを再認識させるというわけだ」

アオ：「ブヒヒッ、ヒヒッ、ブルン、バフッ」

チャービル：「ああ、分かった。もう一度再教育するべ。

今度は体罰もためらわず考慮すべ」

アオ：「グフ、グフ、グスン」

何とか、収まったようだ。しかし、任務下の馬というのも、辛いものだ。ふと、競走馬の悲哀を連想した。

私は、さらに浦島太郎の話を思い出した。

私は、太郎を乗せていったカメというのがUFOではないかと思っていたからだ。

ちょうどこの船も亀甲型をしているから、関連があるかも知れない。

私：「あの一、むかしむかしの話しなんだけど、浦島太郎という人物が、助けたカメに連れられて、竜宮城に行ったとかいうのを聞いたことはないですか」

チャービル：「はあはあ、それは今から1400スポロンほど前の、ヘマトップ星人のところで起きた事件だな。

ウラシマという名前で分かった。

それは有名な事件だぜ。

それが入植魂の教育のあり方について、
再考させ、充実させる元になったんだからな」

私：「そんな宇宙に轟くほどの事件だったんですか」

チャービル：「あの当時ではな。亀は、パクという名のスッポンだった」

私：「えっ、スッポンだったんですか」（何とエー加減な話か）

チャービル：「そうだよ。食い辛抱のパクは、地元の子供らの仕掛けた
マテガイをつけた釣りバリにかかって、
引っ張りあげられた。
その頃の針には、返しなどついていなかったから、
余計なものが釣れたと思った子供は
振り落とそうとしたらしい。
ところが、パクは食い辛抱だったし、気性が荒かったから、
食いついたまま放さなかった」

私：「ずいぶん、実情に詳しいですね。
釣りバリに返しがあるだの無いだのってことまで」

チャービル：「放っといってくれるか、この面白いときに。
さて、子供らは、手で触れると噛みつかれるかと思い、
竿にぶら下げたまま、家まで持って帰った。
だが、親は仕事でいなかった。そこで、子供は考えた。
土間にカメがある。それに入れてふたをすれば、このカメ、
夜がきたと思って眠るべなとな。
空いたカメに入れて、釣り糸も竿もついたまま、ふたをした。
そして、みなしてどこかへ遊びに行ってしまった」

パクは、こうしてカメの中に取り残されたのだ。
マテガイを食べ終わった後は、硬い針以外に何も無い。
その針も、その家の親が、竿の置き忘れと思って
いっしょに持ち去ってしまった。
餌のない針に食らえ付いてばかりいられなかったからな。

こうして、くる日もくる日もパクは、えさを口にできなかった。
このひもじい中で、思った。
ああ、わしゃ食い意地が張っていたわい。
それに、反発精神ばかりで、少しも妥協しようとしなかった、と。
生まれて初めて、反省らしいことをしたのだ。
いいか、こうした大きな心の変革を経験してきたものでなければ、
いざというときの任務は遂行できないんだぞ」

私：「そんなに大きな変革なのかなあ」

チャービル：「カメにとっては、大きいんだよ。さて、それからだ。
隣村のウラシマ君がたまたまこの家に用事があってやってきた。
それも、誰も家のものがないのを見越した上で、
食べ物を物色しようとしてだ。いろいろには何も無い。
土間にカメが四つあるのを見て、一つずつ開けていった。
一つ目には、水だ。二つ目、三つ目には何も無い。
四つ目に何かが入っている。
おお、しめしめと、暗い中に手を突っ込むと、
ごつごつした塊が触れた。
ちょうどいい手頃さとばかり、取り出してみても一度びっくり。
なんだカメじゃないか。
実はこの時、パクは空腹で弱っていたといっても、
まだまだ力はあった。だから、せっかく
目の前においしそうな指が五つも現れたときには、
力をふり絞って、その一つに食らえついたとしても
不思議ではなかった。
しかし、彼には心境の変化があったんだ。
この時、わざと首を甲羅の中にすぼめて、
どうなるか見ていたんだよ」

私：「そうですか」

私は、あくびをこらえながら聞いていた。

チャービル：「ウラシマは、カメまで食ったことはなかったから、
くそつたれと、もう一度カメに収めかけた。

そのとき、パクは助けてくれたお礼を言おうと、首を覗かせた。
ウラシマはそれを見て、うわっスッポンじゃ、と、手を慌てて放した。
ぼとりと土間に落ちる。ウラシマは、長居は無用と逃げていく。
パクは、短時間ながら、恩人の特徴をしっかりと覚えておいたんだ」

私：「それ、本当のことですか」

チャービル：「この場では、本当のことになっている。ん？・・・
いちいち、そんなこと言わせるんじゃないよ。だからな、
あんたはウラシマを情け深い立派な人と聞いたかも知れん。
しかし、英雄の伝承というものは、とかく美化されがちなんだ。
桃太郎しかり、金太郎しかり、ドラゴン太郎しかり。
さて、その後の成り行きがどんなものだったか」

そう言いながら、チャービルはあまり良くない、
という風に顔を左右させた。

チャービル：「パクは、縁の下に潜り、
生えていた苔を食べて命をつないだ。
そして、三日後に、夜陰に紛れて外に出たところを、
スカウトシップに発見されたってわけだ」

私：「他に動物は見当たらなかったんですか」

チャービル：「そりゃ、たくさんいただろう。しかしな、シップの
精神波動観測レンジにかかったのは、パクだけだった。
パクの心からは、5色の光が出てたんだよ」

私：「それは何を意味するんですか」

チャービル：「感謝、奉仕、忍耐、寛容、・・・といった徳性だ。
色に直すと、オリンピック5輪の色になる。
笠谷はよう飛んだな。宇宙にもファンは多い。（これでこの話、いつごろの作品か分かりますね
）
パクは長期間のカメの中の暗黒のひもじい暮らしのうちに
徳性の基礎を作り、救い主の出現で、いっきに開花させたのさ」

私は、どう言ってもいいかわからず、口を開けて聞いていた。

日頃厭世的な私も、やや感動を隠せなかった。

また、世界神話の7色の光を発する神亀の話の思い出した。(クプカ星にその話はあるという) 5色なら、及ばないまでも、の感がしないでもない。

チャービル：「しかし、運命というものはすごいものだ。

確かに偶然が導いたにせよ、そんな風になったカメを、カメに残したままで放っておかなかったんだからな」

しかし、カメ、カメとややこしい話である。

少しは漢字の使い分けをして欲しいものだ。

私：「では、スカウトシップで、パクの希望を聞いたわけで？」

チャービル：「そうだ。適性は充分と判断されたから、後は本人の希望だけだ。

すると、パクは、恩返しをするには小さなカメの体では不可能だからと、船に成る道を選んだんだよ」

私：「なんという殊勝な心がけ」

チャービル：「そうだと。パクはサービス精神に燃えていたんだ。

パクには、アオよりもひと周り小さい同形式の船があてがわれた。

ヘマトップ星は、俺達の兄弟星なんだ。

だから、開発機種に共通性がある。

よって、向こうで発生した問題は、こちらの問題でもある」

私：「ひょっとして、ウラシマさんの事件は、予想していなかった？」

チャービル：「そう。ヘマトップのチームは、パクの欲求をよく理解していなかったんだ。チームワーク精神だけで、

メンバーはその中に管理できるという甘さもあった。

だから、パクの入った船がよもやあんな行動を取るとは思いもしなかった」

私：「ウラシマを連れて行ったこと？」

チャービル：「そうだ。チームのものが乗っている最中にでだぞ。制御室では、みながそれぞれのポジションについていた。シップアイに、ある奇妙な赤マークがついたかと思うと、それがどんどん拡大していった。それが画像に変わってみれば、何とウラシマだったのさ。そのとき、コントロールチーフは、船のコンピューターが制御不能に陥ったことを知った」

私：「それは大変です。事故になる可能性だってありますね」

チャービル：「それもありうるだろう。だが、この時は、ウラシマの誘拐から、ヘマトップ星帰還のルート乗せまで、パクがすべて仕切ってしまった」

私：「ありゃー。それはHALさながらだ」

チャービル：「スケジュールは、完全を期していて、不慮の際の余裕を一切取っていなかった。このため、このチームは、後で散々だった」

私：「というと？」

チャービル：「ウラシマも一つの命。チームがヘマトップ星で、次の現地での任務を帯びるまで、総力あげてウラシマの面倒を見なくてはならなくなったのさ」

私：「そりゃ大変だ。生活が違うし、価値感も違うでしょ」

チャービル：「もちろんだ。整備された町を竜宮と見てくれたまでにはいい。ところが、ヘマトップ星の住民は、男でもみなきれいな顔だちで、地球人の美女クラス以上に違いなかった。チーム員はみな男。それが主体となって面倒を見るとなったとき、おかしい事態となった」

私：「うわー。想像つきますね」

チャービル：「このウラシマ、酒は要求するわ、
お酌を要求するわ。はては気心知れ合った
チーム員に無礼まで働くようになった」

私：「ぶ、ぶ、無礼？」

チャービル：「あんたがそんなに興奮してどうすんだよ。
そうだ。求婚までしたんだ。求婚だぞ」

私：「カーッ。なんてことでしょう。球根！」

チャービル：「そのチーム員、男だから無理だと言い張ったが、
酔った勢いもあって、何とまあ、おおかまわぬ、
そなたは男姫じゃ。おお、乙姫と呼ばせてもらおうかな。
乙姫。こちゃ参れ、と来たもんだ。
どれほど精神性が重要性かが分かるう？」
(浦島太郎さんには、物語の都合上とはいえ、お詫びします)

私：「はあーっ。今もこういうテアイはいるけど、
昔もそう変わらんかったんですね。
で、すぐには連れ戻ることはできなかったのですか」

チャービル：「そうなんだ。チーム員のしでかしたことは、
チームの中だけで処理する。
これがヘマトップ星の掟だったから、ウラシマを連れ戻るには、
パクを説得するしかない。だが、パクは頑固だった。
納得させるまで、60スポロンもかかったんだ。
その間、チームのものは交代制で面倒見に当たったが、
なにぶん慣れないことで心身症が続出したので、
しかたなく、ウラシマのために
バーチャルリアリティーのソフトを作って、
催眠状態下でしばらく遊ばせておくことにした」

私：「なるほどね。テスト時に見落としていたパクの固癖が、
ここで噴出したって感じですね。
しかし、そのフォローのためにソフトまで作るとは」

チャービル：「そうなんだ。それは竜宮ソフトとって、地球人観察の粋を集めた傑作だといわれている。制作に当たった2名のうちの1人は、逆にハマってしまって、任務を辞退して、地球に降りて帰化してしまった。クメ・トンピシャッチという名だったので、現地で久米仙人とか言われたそうだ」

私：「はあー。それはトンピシャですね。歴史の勉強になります」

チャービル：「それからが入植者選抜および教育システムの再構築となった。ヘマトップ全体ばかりか、俺達の星、さらには同じやり方をしている大半の文明星に波及することとなった」

私：「いや、心の問題というのは大変ですね」

チャービル：「この機種の特徴は、入植魂も、一人の乗り組み員として認めていることにある。つまり、配属先では、直感に優れた水先案内人として、重要なポジションにあり、それゆえ人間に負けず劣らずの責任が持たされるわけだ。つまり動物魂といえど並みのものでは勤まらんし、間違いがあれば、チーム全体がカバーに回らねばならん。それゆえ、チームワーク作りと、総力をあげてのメンバー教育が大切になるわけだ。わかってくれたかね」

私：「わかりました。いろいろ苦勞がありますね」

チャービル：「おまけにもう一つ。あらゆる行動には心に関わるということで、あらゆるスケジュールには余裕が持たされることになったんだ」

私はその後で、起用される者に、人間も使われているかどうか聞いた。すると、昔はその場合もあったが、今はないという。というのも、心の純粹さが重要であり、知識の豊富さというのは心の不安定さを招き、

かえって邪魔になるとか。

試しに私はどうかと聞いてみたら、

あなたは雑念だらけのβ波ストレス状態にあり、

5分たりとも用いられるものではないとのこと。

地球人のほとんどが、今そうだと。

それより、早くスクランブルエッグを作ってくれよ、

と懇願されてしまった。

まあ、お互い安心できる話ではあった。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

食事を作っている際、チャービルに、

アオに対して少し可哀想なのではないかと

指摘した甲斐があっただけ、その後、

アオが誘拐した雌馬をチームで起用しようということになり、

アオより一回り小型の船になって、

いま夫婦船として活躍している。

というのも、あのときのアオの会話の説得力に、

実は雌馬はいたく感激したというのだ。

チームは、さらに気を利かせて、無人小型船を

彼らの子供として夫婦のために用意した。

今までこの館に3機そろってやってきたのは、20回に及ぶ。

夜空に3つの点滅光が見えたら、それは飛行機ではなく、

アオの一家が任務を帯びて飛んでいる場合があるので、ご注意。